

大学1年次における教育現場での体験的教育実習 (体験実習)の試み

A trial of teacher training by experience in the school scene of freshmen in college.

兄井 彰

Akira ANII

(福岡教育大学保健体育講座)

要 約

福岡教育大学では、1999年度より教育実習の改革が行われ、今日の教育現場が抱える学級崩壊やいじめなどの難題に対応できる教員養成を充実させるために、大学4年間を通じて学生が何度も教育現場に向かう機会を確保する系統的教育実習体制の設定が行われた。昨年度は、1年次生を対象にした体験的教育実習(体験実習)が実施された。この体験実習は、大学周辺の協力学校・園で行われる行事や課外活動に教師の補佐として参加し、子ども世界の理解と教職意識の向上や教育実践への関心・意欲・課題意識などを高めることが目的であった。

本研究では、この体験実習について、学生だけではなく、協力校、指導教官を対象に実施したアンケート調査から、実習の意義や効果、さらに今後の課題などを総合的に明らかにする。

キーワード：教育実習、一年次実習、協力学校・園、行事参加、教師力量形成

1. はじめに

学校現場での教育実習は、教員を志す学生にとって、精神的に大きく成長する重要な役割を担っている。そのため、学生時代に、学校現場での実習体験を数多く重ねることは、優秀な教員を養成する最良の指導方法である(有吉, 1994)。

福岡教育大学は、1999年度に策定された大学改革案に基づき、さまざまな取り組みが行われ、その具体策の一環として、教育実習の改善と拡充が行われた。この新たな教育実習の取り組みは、1997年度に教育実習運営委員会が学長に具申したマスタープランに基づいている。この教育実習のマスタープランは、今日の教育現場が抱える学級崩壊やいじめなどの難題に対応できる教員養成を充実させるために、教員養成3課程(初等教育教員養成課程、中等教育教員養成課程、障害児教育教員養成課程)の学生に対し、大学4年間を通じて何度も教育現場に向かう機会を確保する系統的教育実習体制を設定するよう求めたものであった(表1参照)。このような系統的教育実習の試みは、全国的に数少ないものである。

表1 各年次における教育実習の改善
(教育実習科目配当表)

年 次	実習名	内 容
1 年次	体験実習	【協力校で実施】 近隣の幼稚園、小学校、中学校及び地域教育機関で実施される行事・課外活動や事業に参加し、先生等の補助を行い、子どもに付き添い見守り、安全に気を配るという交流の中で、子どもの様々な可能性に目を向ける教育者の視点を体験する。
2 年次	観察参加	【主として附属学校】 3年生が教育実習で行う研究授業を観察し、反省会に参加する。授業記録と反省会での指導事項をレポートとして提出し、教育実習への心構えを養う。
	基礎実習	【附属学校及び協力校で実施】 学習者を目前にし、授業前の教材研究実地の授業参観、参観した授業を録画・文字化し、授業者を囲んで授業を検討し、学び取るものを明らかにする。さらに授業改善の方策を考え、模擬授業を試みる等の授業を構想する力を付けさせる。
3 年次	教育実習(本実習)	【附属学校及び協力校で実施】
4 年次	研究実習	【附属学校及び協力校で実施】 自らのテーマを持って学校現場に入り、継続的・日常的に子どもや教師と生活しながら研究を進め、臨床的・実践的研究の方法を身につけさせる。

その具体的な教育実習の改善と拡充として、昨年度から体験実習が立ち上がっている。この体験実習は、1年次に近隣の幼稚園、小学校、中学校及び地域教育機関で実施される行事・課外活動や事業に参加し、先生などの補助を行い、子どもに付き添い見守り、安全に気を配るという交流を体験するものである。

このような1年次実習を取り入れている国立教員養成大学・学部は、1995年に福島大学教育実践センター実習研究部が行った調査によると、3大学であり、1997年度に日本教育大学協会第二常置委員会が行った教育実習改善に関する調査によると、宮城教育大学、上越教育大学、兵庫教育大学、大分大学、佐賀大学の5大学である。

その内容は、宮城教育大学では、附属学校園での見学実習であり、兵庫教育大学では、系統的な教育実践能力を育成するために、一年次で、幼稚園、小学校、中学校、養護学校での見学実習(実地教育Ⅰ)が実施されている(長澤, 1997)。また、大分大学では、教育実習の事前指導として、子ども達との触れ合いや教師への思いを早い時期から自覚させるために、公立学校で体験的な実習を実施している。上越教育大学や佐賀大学での取り組みについては、資料収集が入手できなかったので詳細は解らないが、1年次に2日間程度の実習が設置されてるようである。

また、上記の調査から漏れているが、岡山大学でも、1994年度から教育実習の改革が行われ、それに伴い、1年次から教育現場での実習が組み込まれている。その内容は、附属校1日と協力校1日の2日間の観察・参加で、授業参観をしたり、共遊びや学活などの活動に参加したりするものであった。この実習の効果について、学生に対するアンケート調査(羽原, 1995)が行われている。それによると、実習後に、学生が「教職」に対するイメージを具体的に持つことができ、教職意識の質的变化が見られると報告している。さらに、1999年度からは、岡山大学においても教育学部改組に伴い教育実習の見直しが行われ、1年次実習も、2年次ににおいて学生が自ら専攻する学校種を自己決定する上での基礎的な体験を確保するということから、附属小・中学校での観察・参加(小学校で1日、中学校で1日の2日間)と実習先の変更が行われている。多様な学校種の教育体験を保证するこの取り組みは、学生へのアンケート調査により、①教職への意欲を高め、②専攻する学校種(取得したい教員免許状)を自己決定する上で効果があることが報告されている(黒崎, 1999)。

以上のような他大学の取り組みを見ると、1年次実習は、附属校や協力校での観察・参加が一般的であると考えられる。実際の教育現場に出向き、授業やさまざまな活動に参加することは1年次生にとって、貴重な体験であり、その後の学生生活を方向付ける影響を持つと思われる。しかし、1年次生がどの程度観察力を備えているか、さらに、教師としての行動をどの程度

取れるのかは不明であり(羽原, 1995)、このことは、1年次生を教育現場に出す上で若干の不安材料である。

そこで、本大学の一年次実習は、観察・参加という、どちらかという受動的な内容ではなく、協力校・園で行われる行事や課外活動に実際に参加し、先生などの補助を行いながら、さまざまな実務を行うといった能動的な活動をその中心として実施した。この実習では学生が協力校・園の先生の手助けをする中で、観察力の不足を自覚し、それを補う努力をしながら、適切な教師としての行動はどのようなものであるかを考える契機を与えることが期待できるものである。

本研究の目的は、この体験実習について、学生だけではなく、協力校、指導教官を対象にアンケート調査を実施し、その結果から、体験実習の意義や効果、さらに今後の課題などを総合的に明らかにすることである。

II. 体験実習の概要

(1) 目的

1年次に選択科目として設定された体験実習(選択: 1単位)は、学校教育3課程(初等教育教員養成課程、中等教育教員養成課程、障害児教育教員養成課程)の全学生(定員: 430名)を対象に、実際の教育現場として協力校・園(大学近隣: 宗像地区の小・中学校、福岡県内の盲・聾・養護学校、附属幼稚園)に出向き、運動会・キャンプ・文化祭などの学校行事や課外活動に参加し、園児・児童・生徒と触れ合う体験の中から、子どもの世界を理解する手がかりを得ることを通して、教育実践への関心・意欲・課題意識などを高めることを目的とした。

(2) 事前の準備

本実習を成功させるためには、大学や附属学校・園だけでなく、大学近隣の教育機関との緊密な連携協力を図り、数多くの学生の実習受入を承諾していただく必要があった。そのため、実施前年度から教育実習運営委員長及び教育実践支援室の室長・係長が、何度も宗像地区の小・中学校の校長会に出向き、体験実習の趣旨や目的、実施方法を説明し、受入を依頼、1998年度中にはほぼ承諾された。参加行事・課外活動について、1999年度の協力校・園の学事日程が決まる4月以降に調査し、行事や課外活動の集約を行った。それを基に、各学校・園の規模や児童・生徒数を考慮し、併せて学生の専門領域を勘案して、学生数を配当した。原則的には、初等教育養成課程の学生は、小学校(うち幼児教育領域は、附属幼稚園)、中等教員養成課程の学生は、中学校、障害児教育教員養成課程の学生は、福岡県内の盲、聾、養護学校へ配当した。1999年5月中旬には、対外的に実習を行える体制が整った。

5月下旬に、指導・引率教官を対象に学内での説明会を行い、実習の目的や内容、協力校・園との交渉状

況を説明し、協力学校・園へのあいさつ、日程などの細かい打ち合わせを各指導教官(あるいは引率教官)が行うように依頼した。さらに、参加学生へのガイダンスについて、教育実習運営委員会が作成した資料を基に、あいさつや言葉遣い、服装、学生であっても教師として扱われることなど、実習に対する諸注意や心構えを徹底して指導するように各教官に求めた。また、実習実施の初年度なので、対象学生全員が受講するように、履修指導することも併せて依頼した。

(3) 実施形態と状況

学生は、事前指導を受けた後、各協力校・園で実施される行事や課外活動に全日では2日間、半日の場合は3回以上参加し、その後、事後指導を受けた。1999年度に宗像地区の小・中学校で学生が参加した行事や課外活動は以下の通りである。

小学校(全22校中21校、22行事・課外活動):運動会(12校)、キャンプ(6校)、水泳教室(1校)、研究発表会(1校)、鍛錬遠足(1校)、児童集会(1校)で、271名の学生が参加した。

中学校(全11校、15行事・課外活動):文化祭(4校)、ふれあい教室など(4校)、運動会など(2校)、合宿訓練など(2校)、部活動(1校)、駅伝・マラソン大会(1校)、餅つき大会(1校)で、計133名の学生が参加した。

協力学校・園で学生に対して対応が多少異なっていたが、大学側が準備すべきこと(実習日誌の作成など)まで、協力学校・園で事前に準備を行ってもらっていたりと、おおむね好意的に受け入れられていたと思われる。

III. 調査方法

各行事・課外活動の時期が、各学校・園で異なっていたため、全学生の实習が終了後にアンケート調査を行った。

調査は、協力校、指導教官、学生を対象に実施した。なお、学生への調査は指導教官を通して行ったため、指導教官が、その意見を集約した結果が提出され、正確な調査対象数は、把握で出来なかった。しかし、ほぼ全学生から意見が聴取できたと思われる。

調査項目は、協力校及び指導教官に対しては以下の3項目を設定した。

- 成果ならびに全体的な感想
- 課題・問題点(反省点)
- 来年度へ向けての改善点・検討問題

であった。

学生に対しては、

- 良かった事・勉強になったこと
 - 反省すべき点・もっと留意すべき点
 - 来年度へ向けて大学や実習校として検討・改善してほしい事
- の3点であった。

本研究では、昨年度大学として初めて協力学校へ実

習の受入を依頼し、最も問題や課題が多いと考えられる宗像市・郡の小・中学校での実習について調査した結果を報告する。

IV. 調査結果と考察

(1) 実習に対する協力校の意見

この実習に対して、協力校はおおむね好意的であった。例えば、“部活の雰囲気が新鮮になったし、活気づいた”、“児童との交流が十分にでき、教師を目指す学生にとって純朴な子どもに接することにより、さらに夢が膨らんだと思う”、“学生にとって教育現場や教師の仕事に触れることができ、良かったのではないかなと思う”などの感想が見られた。これは、普段、関わる機会の少ないお兄さんやお姉さんが教育現場で活動することによる学校自体の活性化と、教師として子どもに接する学生の緊張感が、好意的に受け入れられたためであろう。

また、職員が少ない小規模校などでは、安全管理などの人手が必要な仕事や配慮が必要な子どもがいる場合などで、学生が重点的に関わってもらい、教師補助の面で評価できるとの意見が多かった。

今後の課題としては、学生の実習に対する心構えが不十分で、偏見や茶髪などの身だしなみが悪かったり、事前打ち合わせに欠席するなどの不適切な態度が一部の学生で見られたことが指摘された。この点に関しては、事前に実施した指導教官に対する実習の説明会で、学生に対する諸注意の徹底を依頼したが、その趣旨が学生に直接的には伝わらず、教師としての態度の重要性を無理解のまま実習に参加した結果であろう。今後、徹底した事前指導を(指導教官だけではなく)実習担当の全教官が学生に行うなどの改善を行う必要がある。

さらに、教師からの指示を待つ学生が多く、主体的に教育に関わる意識を持つことが必要であるとする意見も多かった。現在の学生の気風を反映していると言えなくもないが、教職を志す者であることから、1年次の実習であっても能動的に教育活動に関わる態度の育成が望まれる。この点でも、しっかりと事前指導が行われるべきで、学生の実習への心構えを十分に持たせる方法や対策の必要がある。

改善を要する点は、“協力校と教官、学生が十分に打ち合わせを持つ時間が少なかった”、“実習の期間が短い”などが指摘された。協力校・園と教官・学生との事前の打ち合わせを早めに行う体制の整備、さらに、一つの行事だけでなく、複数の行事に参加させるなどの実習の充実と拡充を願う意見が多い。理想的には、年間を通して定期的に何度も学校現場に出向く機会を持つことが、学生にとって教職意識を高め、教育現場を理解するためには有益であろう。しかし、実習に参加するためには、大学の正規の授業を欠席しなくてはならず、また、学生の時間的・経済的な負担を考える

と事前打ち合わせを多く持ち、実習期間を延長することは簡単なことではない。今後、休暇期間に実習を実施するなど、実習全体の在り方を大学の学事日程などを考慮しながら設定する工夫が必要である。

加えて、この実習の目的や意義を学生・引率教官が十分に理解し、教育現場で行動してほしいとの要望もあった。“実際の教育現場に臨むのだ”という学生の意識確立は言うまでもないが、指導・引率教官が、教員養成を使命とする大学に所属しているとの自覚を持ち、実習に対する意識をある程度統一して学生に指導していかなければ、全学生の態度変容も望めないのではなかろうか。そのためには、実習に対する各教官への説明会を複数回行うような対策も講じなければならないであろう。

(2) 実習に対する指導教官の意見

教官側も学生の実習時での行動や感想から、新しい試みとして評価すべき点があるとの意見が多かった。“いきなり教育実習(本実習)に行くのではなく、それ以前の段階で、比較的にリラックスした雰囲気の中で、学校現場に親しめたことは良かった”、“学生の教職に対する意欲や意識を高める上で、大きな効果があった”などの意見が見られる。

しかし、“十分な事前指導ができなかった”、“連絡や引率に多くの時間が必要であった”、さらに“行事だけの飛び入り参加では、日頃の子どものふれあいがなくて、良い体験は難しいのでは?”、“子どもと接する場面や直接指導する場面が少ない行事の参加では不十分では?”との声もあり、各指導教官で意識の差が見られた。これは、体験実習の捉え方が各教官で異なるためではないかと考えられる。大学入学直後に行われる実習であるので、学生は、授業観察の視点や教職に対する知識がまだまだ不足している状態である。そのため、この時期の実習としては、授業の観察が中心となる観察参加のような形式ではなく、学生が能動的に参加しなければならない行事や課外活動に参加するが形式が取られている。しかし、行事や課外活動を手助けするといっても、各協力校でその実態は異なり、ほとんど子どもたちとふれあう機会が無い場合もあったと思われる。そのような行事や課外活動であっても教師が関わらなければならない業務である。学生は、どちらかという授業に目が向かいがちであるが、このような業務に従事することで学校の側面を理解する経験を持つことができると思われる。今後は、このような体験実習に対する基本的な捉え方を、全学教官に十分に説明する機会を数多く設け、理解を求めていかなければならないであろう。

今後の改善点としては、大学側の試験期間中は実習を割り当てない、事前指導が十分にできるような日程など、スケジュール調整が必要であるとの指摘が多かった。実習の日程は、事前に協力校に対して実習が可能であり、学生の参加を希望する行事・課外活動を調

査を行い決定した。協力校の希望順に学生を配当した。その際、大学の学事日程を協力校に十分に通知しないまま調査を行ったため、試験期間中の実習に学生を参加させなければならなかった。実習実施にあたっては、協力学校に大学の学事日程を勘案し、実習可能な行事・課外活動を選出してもらい、日程調整を行い、学生を各行事・課外活動に配当するという手続きが取られるべきであった。

さらに、学生への諸連絡の徹底や事前指導の充実などの課題も提出された。これは、各担当教官に学生の指導を徹底して行ってもらうしかないが、教官自身も、教員養成大学における教師指導能力の向上の一環として実施される各実習の考え方を熟知し学生に対応することが望まれる。

加えて、体験実習の経験を学生間でシェアリングできるような事後指導の必要性も指摘された。この点は、各指導教官の手腕にかかるところが多いが、実際に充実した事後指導を行っているところもある。実習に対する情報の集積とその公開は、実習を効果的に実施し、さらに次年度の実習を良いものとするために欠かすことのできない仕事である(福島大学教育実践研究指導センター教育実習研究部、1993; 1994; 1995; 1996)。そのためにも、実習後の指導教官による経過報告や協力校や学生へのアンケート調査を今後も行って行く必要がある。

(3) 実習に対する学生の意見

ここでは学生の生の声を紹介したい。好意的な感想は、以下のような意見であった。

- ・初めての实習ということで現場に行ってみて、良かった点は、子どもが‘先生’と呼んでくれることでした。そして当たり前の事ながら、子どもに平等に接して、メリハリのある行動をすることが勉強になりました。
- ・今まで先生と呼ばれることは1度もなかった(当たり前だ)けれど、この体験実習で初めて、子どもに‘先生’と呼ばれて、何かとてもうれしくて…。
- ・今まであまりに漠然としたイメージしかなかった教師という職業が身近なものになり、あらためて、将来、教師になろうと思った。
- ・この体験があることで、自分の夢の実現に一步踏み出した気がした。
- ・子どもを教えること以外に、教師にはさまざまな仕事や苦労があることを知った。

以上を見ると、学生が、実際の教育現場に出ることにより、教職の明確なイメージを持つことができているとうかがえる。

反省すべき事や留意すべき事は、以下のものであった。

- ・子どもをどのように扱ってよいのか分からなくなるので、その辺の勉強が必要。
- ・慣れてくると、子どもたちは、とてもなついてくれ

て親しくなれた。しかし密着しすぎると「指導」というものが成立しなくなるといった。

- ・あいさつなどもしっかりできず、先生方にも迷惑をかけた気がする。
- ・自分がいかに他人の指示によってしか動けないのかを実感した。

このような感想を見ると、この体験実習は学生の意識改革に効果があったと考えられる。初めて“先生”と呼ばれる嬉しさと責任感、子どもに囲まれ楽しい学校生活が送れるという教職への夢や希望、現時点では当たり前であるが教師としての力量不足の痛感、教師のさなざまな仕事の大変さなど、多くの体験や経験を学生はしてきている。このような体験や経験を大学生生活の早い時期に実感できることは非常に重要であろう。教育現場に実際に出向き、行事や課外活動に参加することを通して、教職に対する明確なイメージが形成できれば、教職につくという目的意識も明確になる。このことにより、教師になるためにどのような勉強をしなくてはならないか、あるいは教師になるために今の自分に欠けているものは何かなどの問題に気づき、実習後の大学生活において教育実践への関心や意欲が高まり、行動の変容が期待できる。

次年度の改善点として、ここでも事前指導の徹底が挙げられていた。協力校、指導教官、学生の3者から、事前指導の徹底という課題が挙げられたことから、今後の体験実習の実施にあたっては、協力校と大学側が緊密な連絡を取り、その情報を的確に学生に流し、協力校・指導教官・学生の時間的・経済的な負担が少なくなるような事前指導の実施方法の改善が急務であろう。

また、教官・学生相互の体験実習の目的や意義の徹底、実習期間の延長(子どもたちとふれあう時間を多くする)、交通費などの出費の軽減などの意見が見られた。

以上の改善点も、指導教官の意見と重複しており、今後、実習の実施にあたり、細かな点まで考慮して計画を立てる必要がある。

V. まとめ

昨年度、実施された大学1年次における教育現場での体験的教育実習、すなわち体験実習の意義や効果、さらに今後の課題などを総合的に明らかにする目的のために、協力校、指導教官、学生の3者を対象にアンケート調査を行った。その中で、昨年度初めて協力学校へ実習の受入を依頼し、今後の課題が最も問題や課題が多いと考えられる宗像市・郡の小・中学校における実習についての調査結果に考察を加えた。1年次生の教育現場での実習は、全国的に見ても珍しく、また、授業の観察参加ではなく、行事や課外活動での教師の補助という能動的に学生が活動しなければならない実習の試みは、教員養成大学における取り組みとして類を見ないものであった。

調査結果は、協力校、指導教官、学生とも、体験実習について、全般的に好意的な意見が多く、実習の効果が認められるとしていた。特に、1年次から教育現場に出向くことにより、教職についての具体的なイメージを学生が持つことができ、実習後の教育実践への関心・意欲がより一層高まったと考えられる。

今後の課題としては、実習期間の日程調整や協力校、指導教官、学生の実習に関わる時間的・経済的な負担の軽減、事前事後指導の徹底などが指摘された。

VI. おわりに(教育実習運営委員及び引率教官としての雑感・実感)

ここで、研究論文の体裁とは異なるが、体験実習に対する私見を述べさせていただきたい。

今回、教育実習運営委員として、体験実習の立ち上げに関わって、多くの勉強をさせてもらった。まずはじめに、新しい試みを実現に移すことの難しさを感じた。実習の趣旨自体を練り上げ、その実施方法を煮詰め、各関係部署(大学内外)へ折衝し、大学内での意思統一や関係学校に協力の依頼するなど多くの問題にぶつかりながら実施にこぎ着けた。それでも何とか無事に終えることができたのは、学長や実習運営委員正副委員長、教育実践支援室長・係長などなど多くの人々のご尽力によるものである。

さらに、引率教官として、学生と共に学校に出向き実感したことは、学校が子どもの学ぶ場であると同時に、教師自身の学ぶ場であるということである。まさに、“百聞は一見に如かず”と学生が得たものは計り知れず、大学では学べないことを学生は体験してきている。私自身も学生を引率する中で、教育現場の難しさや学生のモチベーションの持たせ方など学ぶことが多かった。このような経験は、私にとっても、おそらく学生にとっても教育の根本のところで、重要な位置をこれから占めるようになるであろう。

今後、この実習を通して、教育現場の学びの一端が、学生、教師、教官、子どものそれぞれに感じ取れるに、改善策を講じる必要を今、痛感している。

引用文献

- 有吉英樹 1994「教育実習の改善方策の経緯、問題性及び課題についての一考察」上原貞雄編 現代教育行政学研究 溪水社 Pp.80-92.
- 羽原貞夫 1995 一年次生観察・参加の試み—教職に関する学生の意識を中心にして— 教育実習研究年報 6, 65-75.
- 教育実践研究指導センター教育実習研究部 1993 教育実習の改善に関する基礎調査 福島大学教育実践研究紀要 23, 143-161.
- 教育実践研究指導センター教育実習研究部 1994 教育実習の改善に関する基礎調査(第2年次) 福島大学教育実践研究紀要 25, 189-205.

- 教育実践研究指導センター教育実習研究部 1995 教育実習の改善に関する基礎調査(第3年次) 福島大学教育実践研究紀要 28, 99-121.
- 教育実践研究指導センター教育実習研究部 1996 教育実習の改善に関する基礎調査(第4年次) 福島大学教育実践研究紀要 30, 95-114.
- 黒崎東洋郎 1999 学校教育教員養成課程創設の理念に基づく教育実習カリキュラム—1年次教育実習(附小・附中)を中心に— 岡山大学教育学部研究集録 112, 31-36.
- 長澤憲保 1997 事前指導・社会教育施設と連携した観察参加実習—教員養成学部フレンドシップ事業としての取り組み— 第11回日本教育大学協会全国教育実習研究部門研究協議会発表資料日本教育大学協会第二常置委員会 1996 教育実習改善に関する調査報告書 pp. 110.